＜研究ノート＞

高齢期におけるペットロス：適応プロセスに注目して

横浜国立大学大学院　環境情報学府
二階堂　千絵
横浜国立大学
安藤　孝敏

Pet Loss in Old Age: Focus on the Adaptation Process

Chie NIKAIDO
Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

Takatoshi ANDO
Yokohama National University

要旨

近年我が国ではペットブームを経て，犬や猫がコンパニオンアニマルとして社会的に受け入れられている。そんな中，注目されてきたのがコンパニオンアニマルとの死別に起因する飼い主の悲嘆，いわゆるペットロスである。本研究では，インタビュー調査を通して，高齢期にある犬の飼い主の，犬との死別後の適応プロセスについてテーマティクス・アナリシス法を用いて探索することを目的とした。その結果，６名の調査協力者の語りから８つのテーマと 26 のサブカテゴリーを生成した。そしてこれらの結果から，犬との死別後に新たに犬を迎えた飼い主と迎えていない飼い主との間に明らかな相違点と類似点があることを明らかにし，それについて記述・考察した。また，飼い主の死生観と経験が犬との死別による悲嘆への適応に影響する可能性を示唆し，以上の考察から，今後のペットロス研究の課題と展望も示した。

Abstract

In recent years, dogs and cats have been socially accepted as companion animals in Japan after the pet boom. Meanwhile, what has been attracting attention is the so-called pet loss, which is the owner's grief caused by the death of the companion animal. The purpose of this study was to investigate the adaptation process of dog owners in old age after bereavement with dogs using a thematic analysis method through an interview survey.

As a result, 8 themes and 26 subcategories were generated from the narratives of the 6 survey collaborators. Based on these results, it was clarified that there are clear differences and similarities between the owners who newly welcomed the dog after the loss of the dogs and those who did not. It was also suggested that the owner's view of life and death may affect the adaptation to grief due to bereavement with the dog. In addition, it was suggested that the owner's view of life and death might affect the adaptation to grief due to the bereavement of the dog, and from the above consideration, the issues and prospects of future pet loss research were also shown.

1 問題と目的

1.1「ペットロス」と高齢者

我が国でペットを飼うことが一般的なこととなって久しい。近年は少子高齢化の影響により，年少人口を犬・猫の飼育頭数が上回り，ペット産業は緩やかな縮小傾向にありつつも市場規模は大きい（ペットフード協会，2019）。また，ペットたちの住処が屋外から屋内が主流となったことで人との心理的距離も近くなった。ペットの中でも特に犬・猫は，長きにわたるいわゆるペットブームを経て，コンパニオンアニマル（伴侶動物）として人の生活や，時には人生に深く関わるようになったと言える。

そんな中，1990 年代からにわかに注目されてきたのが，飼っていた動物との死別による飼い主の悲嘆，いわゆる「ペットロス」である。

現在のところ，50 代～ 60 代の犬・猫飼育者の割合は減少傾向にあるものの，50 ～ 70 代の犬・猫の飼い主は全体の 4 割近くを占め，70 代で犬・猫を飼育している，あるいは飼育を希望している人の割合も一定している（ペットフード協会，2019）。そして今現在飼育されているコンパニオンアニマルの多くが 7 歳以上の高齢期に入っており（ペットフード協会，2019），高齢者が高齢のコンパニオンアニマルを飼育するということが珍しくないことが分かる。当然その

先には，中高年の飼い主と，寿命の短いコンパニオンアニマルとの死別が待っていることは必定であり，特に，仕事をリタイアないしセミリタイアし社会関係が減少していく高齢者にとっては，コンパニオンアニマルの喪失がその生活に大きな影響を与えうることは想像に難くない。

海外では 1980 年代から欧米でペットロスについての研究が進められはじめ，その蓄積も著しい。例えば Stewart ら（1989）は非公認の死としてのペットロスについて言及しているし，ペットロスに関する定性的研究についてシステマティックレビューも行われるなど（Kemp ら，2016），各国で活発な議論が展開されている。

高齢者のペットロスについても Stewart ら（1985）がペットロス後の適応について述べて以降，高齢者とコンパニオンアニマルの関係について多くの研究が展開されており，コンパニオンアニマルの存在の重要性が認識されていくと同時に，他の対象喪失と同様に一般的な事象として高齢者のペットロスについて言及されている（例えば，Bui ら（2020）など）。

翻って，国内のペットロス研究の広がりはどうか。二階堂ら（2019）の文献研究によれば国内において，幼児期～成年期までのペットロスに関する研究のすそ野は広がりをみせつつも，高齢者のペットロスに着目して進められた研究はわずかであることが指摘されている。

その数少ない研究のうちの一つである二階堂ら（2015）では，ペットを亡くした高齢の飼い主が，死別したペットとの「継続する絆」を持ちながらコンパニオンアニマルの喪失後を暮らしていることが分かった。しかしそれは中高年期にあるペットを喪失した飼い主の，喪失への適応プロセスの一端を示したにすぎず，他の側面についてはいまだ記述されていない。

1.2 先行研究におけるペットの種類の多様さと「ペットロス」の定義の曖昧さ

また，先述の二階堂ら（2019）では，国内の研究においては，飼育されている動物の種類，すなわち，犬や猫，その他の動物（ハムスター・ウサギなどの小動物，爬虫類・両生類・虫類など）を厳密に区別して実施された研究も多くはないことが分かった。しかし例えば犬と猫ではその飼い主の生活スタイルは大きく異なるし，飼育している動物の種類によって，寿命の長短，さらに動物と飼い主との物理的・心理的距離感という点においても，飼い主との関係性が変わってくることは自明であろう。それにより，van Dijk(2019) が指摘するように，悲嘆の深度や様相も異なってくることが予測される。

Kemp ら(2016) の定性的研究の系統的文献レビューにおいても，動物の種類は犬・猫のほかに馬や魚が扱われていることが指摘されており，動物の種類を限定して調査した研究は多くない。

加えて木村ら（2009）は，国内ではペットロスという言葉自体の定義が曖昧であることを指摘している。そこで先述の二階堂ら（2019）ではそれを受けて，国内のペットロス研究において「ペットロス」の定義が大きく分けて「飼育動物との死別体験」，「悲嘆を伴う飼育動物との死別体験」，「飼育動物との死別体験による悲嘆」の 3 つに大別されることを明らかにした。

本研究では，このように研究者によって異なる「ペットロス」を「ペットとの死別体験による悲嘆」と定義づけ，高齢期にある飼い主が，コンパニオンアニマルとしての犬を喪失した後の悲嘆にどのように適応していったのかというプロセスを探索することを目的とする。

2 方法

65 歳以上で，過去５年以内に犬と死別した経験があることを条件に研究協力者（以下協力者）を募ったところ，6 名の協力を得ることが出来た。内訳は，都内ペット霊園の協力を得て，彼岸の法会の出席者に協力者募集のチラシを配布して応募してこられた方が 2 名，その 2 名からの紹介を受けた方が 1 名，筆頭著者の友人からの紹介が 3 名であった。

それぞれの協力者に，事前に横浜国立大学の倫理審査委員会の承認（承認番号：非医 -2018-22）を得た事前説明書を示して研究の趣旨を説明し，同じく倫理審査委員会にて承認を得た調査協力同意書を交わした上で，事前に作成したインタビューガイドに沿ってインタビュー調査を実施した。インタビュー期間は 2019 年 4 月から 2019 年 6 月までであった。

なお，調査協力者には二組の夫婦がおり，その方々

にはそれぞれのご自宅で，夫婦同室の上一人一人別々に時間を設けて調査を実施したため，一方の方には他方の語りが聞こえており，時折記憶があいまいな事柄などについてはどちらかが補完しながら話す様子も何度か見られた。

残る 2 名は個室を借りて 1 対 1 で調査を実施した。インタビューガイドは①協力者の家庭環境，②飼育歴，③死別したペットについて，④ペットとの死別時について，⑤死別後の心境について，⑥現在の心境について，⑦今後の飼育予定であった。

協力者へのインタビュー調査後，録音物から一言一句そのままにテキストデータにして逐語録の作成を行った。その後テーマティクス・アナリシス法（土屋，2016，以下 TA）を参照し，著者が何度も逐語録を熟読したのちに，一番初めにインタビューを行った方の逐語録からコーディングを行った。その内容を，Excel を用いたコードブックに記録し，それらのコードを利用して２番目，３番目と順番に協力者の逐語録をコーディングし，コードブックに適宜修正を加え，テーマを生成した。その後協力者ごとの内容の差異をサブカテゴリーとして導出した。

本研究の目的は高齢期にある飼い主が，コンパニオンアニマルとしての犬を喪失した後の悲嘆にどのように適応していったのかというプロセスを探索することであったため，当初は先述の通り個々の飼い主の，犬との死別後の心理過程に注目して時系列に沿ってコーディングした上，協力者間の語りの類似性と相違性を比較し，テーマとサブカテゴリーを生成した。そのなかで，現在犬を飼育しているか否かによって協力者間の類似性と相違性がより明確になったため，「犬なし」「犬あり」というサブグループに分けてさらに比較した（表1参照）。

調査協力者の属性は以下の通りである。なお，調査協力者のプライバシー保護のため，以下の内容は研究の趣旨に反しない範囲で改変済みである。

Ａさん : 70 代女性。夫，次女，次男家族と同居。専業主婦。４年半前に小型犬1頭と，３年前に小型犬1頭と，それぞれ病死により死別。現在は何も飼っていない。

Ｂさん : 70 代女性。Ｃさんの妻。Ｃさんと二人暮らし。Ｃさんとともに自営業を営んでいる。３年前に小型犬 1 頭と病死により死別。現在は死別した犬と同じ種類の犬を飼っている。

Ｃさん : 70 代男性。Ｂさんの夫。Ｂさんと二人暮らし。Ｂさんとともに自営業を営んでいる。３年前に小型犬 1 頭と病死により死別。現在は死別した犬と同じ種類の犬を飼っている。

Ｄさん : 70 代女性。Ｅさんの妻で，Ｅさんと二人暮らし。4 年前に小型犬 1 頭と死別。かつてはＥさんと共に商店を営んでいたが，3 年前に閉店。現在は何も飼っていない。

Ｅさん : 70 代男性。Ｄさんの夫で，Ｄさんと二人暮らし。4 年前に小型犬 1 頭と死別。かつてはＤさんと共に商店を営んでいたが，3 年前に閉店。現在は何も飼っていない。

Ｆさん : 60 代女性。夫と二人暮らし。夫と共に飲食店を営んでいる。2 年前に大型犬 1 頭と死別。現在は大型犬 1 頭を飼育している。

3 結果と考察

TA は一人のナラティヴを逐語録に書き起こしコーディングしたのちに，それを他のナラティヴから得られたコードと比較する。そしてコード名と内容を修正しながら，共通で語られていることをボトムアップ式にまとめてテーマ（文中にて『』で囲んで表記）とし，協力者によって異なる内容の違いをサブカテゴリー（文中にて【】で囲んで表記）として記述していく。本研究ではその過程で，現在犬を飼っているグループと飼っていないグループとで相違点が多いことに気づいた。そこで「犬あり」「犬なし」というサブグループに分けてさらに分析を加え，そのサブグループ間の比較の結果を表1にまとめた。

3.1 犬との『継続する絆』の表と裏

協力者間での類似点（＝テーマ）として特筆すべき第一の事柄は『継続する絆』であろう。特にＢ・Ｃ夫妻はペット霊園が主催する法事にて協力を承諾してくださったという経緯があるので当然ではあるが，その他の協力者も含め全員が，亡くなった犬を霊園等で供養してもらい，生前の写真をスマートフォン内に保存して見返したり，部屋のあちこちに写真を飾っていたりしていた。中にはお骨を納骨せず，室内に安置して花や水を上げたり話しかけたりしている

表1　サブグループ別テーマの比較

テーマ名	協力者ID	
サブカテゴリー	犬なし	犬あり
	（A，D，E）	（B，C，F）
死別後の初期反応		
強い悲しみ	A，D，E	B，C，F
呆然とする	—	B，C
喪失感	D，E	B，C，F
周囲・コミュニティとの距離		
近親者，近隣の人，親族の慰めを受けいれる	A，D，E	B，C，F
他の犬が目に入らないようにする	A	—
飼い主仲間とのコミュニケーションを避ける	A	—
継続する絆		
霊園等で供養してもらう	A，D，E	B，C，F
お骨を手元に置く	A	B，C
死別したペットの写真を飾る，持ち歩く	A，D，E	B，C，F
花や水を写真に供える	A	F
写真に話しかける	A，D，E	B，C，F
遺品を捨てられない	A．D，E	—
家族間・夫婦間のやり取り		
生前の犬の思い出を話し合う	D，E	B，C
新しく迎える犬について話す	—	B，C
新たに犬を迎えることへの態度		
積極的	—	B，C
消極的	A，D，E，	F
新たに犬を迎えることへの意識		
生活の変化への恐れ	A	—
自らの年齢と体調を考慮する	A，E	B，C
健康問題	D，E	—
自らの人生の終わりへの意識	A，D，E	C
新たに犬を迎えたことによる影響		
新たに迎えた犬による癒し	—	B．C，F
犬がいる生活の再開	—	B，C，F
死別した犬と今いる犬の比較	—	B，C
死別した犬への現在の感情		
埋まらない喪失感	D	C，F
生前と変わらぬ思い	A，D，E	B，C，F
看取った充実感	A，D，E	F

人もいた。

Klass ら（1996）が提唱した継続する絆理論（Continuing Bond Theory）は元々，日本における供養の文化から着想を得たとされており，死者を供養する行動が幼い頃から当たり前となっているだろう高齢者にとっては，相手が動物と言えど，これらの行動は自然なふるまいなのかもしれない。

またこの結果は二階堂ら（2015）の結果を補強するものであり，我が国で既にコンパニオンアニマルの供養や葬儀が一般的になっていることを示唆している。

第二に，『死別した犬への現在の感情』についても『継続する絆』と類似しているが，どの協力者も未だに亡くなった犬を愛しく思っていることが語られていた。こういった死者との関係の継続は，飼い主の精神的健康におおむね良い影響を与えると考えられることから，協力者たちの健やかな適応が伺える。

しかし一方で，遺品という目に見えるものが，飼い主の悲しみを増長することがあったことがサブカテゴリーから垣間見える。

「（犬が乗っていた）カートがどうしても捨てられなくて。1 年もたってからかな，やっとゴミに出しました。（略）…お洋服なんかもたくさんあったから，どうしても捨てられなくて，まだとってあるんですよ。見返すと何だか胸がいっぱいになっちゃって」（70 代女性，Aさん）

「（亡くなった犬の）お気に入りの場所がそこの椅子でね，いつもそこから台所に立つ私を見てたんですよ。それが忘れられなくてね，そのままにしてあります。それがお気に入りの毛布で」（70 代女性，D さん）

以上のように，遺品やお気に入りの場所といった，身近にあって目につくものが生前の犬の姿を想起させ，悲しみを強めることも『継続する絆』の否定的側面として考慮される必要があるだろう。この点についても二階堂ら（2015）による調査結果を裏付けるものとなっていることから，今後は犬との継続する絆の肯定的な面だけでなく負の側面にも着目していくべきではないか。

3.2 飼育者とコミュニティの関係

また『周囲・コミュニティとの距離』も，グループに関係なく，むしろ個々人の対応の仕方の違いが際立っている。

どの協力者も，多くの飼い主がそうであるように，犬の散歩仲間や犬友達と呼べるような関係の相手がいたにもかかわらず，Aさんはそのコミュニティとの関わりから遠ざかり，【飼い主仲間とのコミュニケーションを避ける】【他の犬が目に入らないようにする】ことで犬の死後約 1 年間を過ごしたという。

一方，DさんとEさんは商店を営んでおり，亡くなった犬はその商店の看板犬として愛されていたことから，かつて犬をかわいがってくれていた多くのお客さんから慰問を受け，その人たちと愛犬の思い出話をすることが楽しかったと語っている。

これらのことから，周囲やコミュニティとの関わりは，犬との死別によって薄くなったり，より近しくなったりと，様々な様態に変化することがうかがえる。このことは，外に散歩に出るという犬の飼育上の日常的な習慣が大きく影響しているものと考えられ，他の動物と比較すると犬の飼育者に特徴的なふるまいではなかろうか。

松原ら（2002）も，調査協力者は 8 人と少ないながらも，中高年にとっての犬飼育の意義について調査している。それによると，犬と飼い主の「強い紐帯」の周囲では，犬が飼い主同士を結ぶ「弱い紐帯」で結ばれるネットワークが存在し，そのコミュニティは共通の趣味・関心を持つコミュニティであると同時に，散歩が主に居住地区で行われることにより，共同体に基づく属地のコミュニティをも活性化しているという。

このことと，今回分かった，飼い主それぞれのコミュニティとの距離の取り方の違いから，ある飼い主と犬との死別がそれら大小のコミュニティと響きあう側面があることが推測される。

3.3 現在の飼育状況による違い

一見相違しているように見えて根底では共通しているのが『新たに犬を迎えることへの態度』と『新たに犬を迎えることへの意識』であろう。

「犬あり」グループのBさんとCさんは，新たに犬を迎えることに対して当初は消極的だったものの，や

がて，ペットショップのホームページなどをよく眺めるようになったという。

「僕らももう年も年だし，新しく飼うのは無理かなって最初は話してたの，最初はね。でももし飼うならマンションだから，大きい犬は無理だねって。飼うなら小型犬にしようって」（70 代男性，Ｃさん）

このようにして，Ｃさん夫妻は新たに犬を迎えた。Ｆさんは，ご本人は新しく迎えるつもりはなかったのだが，夫が話し合いもなく急に買って帰って来たのでそのまま受け入れて飼い始めたという。

「悲しくて悲しくてね，写真見ては泣いてたのよ。そしたらね，旦那が突然電話してきて，『可愛いの見つけたから連れて帰る』って」（60 代女性，Ｆさん）

一方，現在犬を飼っていないグループが『新たに犬を迎えることへの態度』が【消極的】である理由は【健康問題】【自らの人生の終わりへの意識】が大きい。この結果はペットフード協会（2019）の調査結果とも矛盾しないし，一般的に考えてみても，身体的に不調を抱えた高齢者が，散歩をはじめ，一定の体力を必要とする犬を飼うことをためらうのはよくあることと思われる。

高齢者が動物を飼うことについては，様々な立場から賛否が集まりやすいトピックではあるが，新たに犬を迎えるにせよあきらめるにせよ，高齢の飼い主の中には自分の健康状態や年齢を考慮しながら決定している人もいることに留意したい。

両グループの相違点としてはやはり『新たに犬を迎えたことによる影響』があげられる。なかでも注目すべきは【犬がいる生活の再開】である。

「もうね，前とな一んにも変わんないんですよ。昼間私が散歩行って，旦那が夜散歩行って，餌あげて」（60 代女性，Ｆさん）

「13 年半犬がいたでしょ，それが急にいなくなったわけだから。落ち着かないわけですよ。でもこの子が来てから，また犬がいる生活が始まった。これがなかったらね，正直，立ち直れてたかどうかわかんない」（70 代男性，Ｃさん）

再度述べるが，犬は他の動物と異なり，どの様な犬種でも散歩が必要な動物である。これが飼い主にとって大きな生活習慣の変化を促すのだが，死別に際しては，逆にその日常がなくなる。このことは飼い主の精神活動にとって影響が大きいのではないだろうか。

これまで，ペットロスの予防的な措置として新しく犬を迎えることや，多頭飼育を勧める記事がメディアなどで散見されたが，その理由としては新たな犬の存在が飼い主の悲嘆を慰撫してくれることを期待する内容が多く，生活習慣としての動物飼育に関してはあまり触れられていない。

Strobe ら（1999）の悲嘆の二重過程理論においては，喪の作業をすることと普段通りの日常生活を営むことの往復を通して，生々しい悲嘆から死者のいない生活にらせん状に適応していくとされている。

これに照らし合わせると，犬の飼い主の場合その日常生活や生活習慣に，死別した犬が深く入り込んでいたことにより，つまり犬がいた日常を喪失することにより，喪の作業により大きく依拠することになってしまい，悲嘆への適応が阻害されることが考えられるのではないだろうか。

そして逆に，死別したのちに再び犬との生活を選んだ飼い主は「犬のいる日常」に復帰することにより，悲嘆が重くならずに済んでいるのではないだろうか。犬だけに限定している研究ではないが，星ら（2016）は，犬・猫を飼育し世話をしている飼い主ほど主観的健康感が高く，2 年後生存と累積生存率が飼育していない人よりも有意に高いことを報告している。主観的健康観と動物の世話に肯定的な関連があるとすれば，先の二重過程理論と合わせて，新しく犬を迎えることによる悲嘆への適応の良さをより詳細に説明できるのではないか。

第二に，「犬あり」グループに少なく「犬なし」グループに共通していたのは【看取った充実感】であった。「犬なし」グループのＡさんは，亡くなった犬に対して後悔の念はないと語っている。

「もうね，これが人相手だったら『ああすればよかったこうすればよかった』ってなるんでしょうけど，このひとたちにはやれるだけのことはやりましたから。やれるだけのことはやったっていう安心感？ていうのかしら」（70 代女性，Ａさん）

ＤさんＥさんもそれぞれ異口同音に，家族全員で最期を看取れたこと，最後までケアをしきれたことをあげ,「後悔はありません」「やりきりましたから」と語っていた。

一方で，持病が急変して犬が急死したＢさんとＣさんは，それとは対照的に，

「今写真で見るとげっそりしてるのが分かるんだけど，当時はわかんなかった。いつも一緒にいて見てたせいか全然わかんなくて。食欲なくって歩かなくなって変だなって病院に連れて行ったらもう手遅れですって」（70 代女性，Ｂさん）

「あんまり急で，もう，呆然。それしかなかった」（70 代男性，Ｃさん）

と，後悔とショックの思いをにじませていた。

このことが，のちに新たに犬を迎えることにつながったのかどうかは不明だが，自分たちができるだけのことをして看取ったという事実は，協力者からは肯定的に語られていた反面，異変を感じ取れなかった飼い主には，それによって拭い去れない悲しみが残されることがうかがえる。

3.4【埋まらない喪失感】を抱えて生きる

先述の相違点・類似点からは離れるが，動物飼育経験の豊富な飼い主ならではの悲嘆への対処と思われたのが【埋まらない喪失感】である。

（著者の「その喪失感が埋まり始めたな，と感じたのはいつ頃ですか」という問いに対して）
「埋まらないと思う。人が死んだ時でもそうだけど，埋まらないでしょう。埋まらないまま生きてくより他ないんじゃないかな」（70 代男性，Ｃさん）

Ｃさんは幼い頃から動物と親しみ，独身時代にもシェパードを飼い自分でしつけるなどしていて，「生き物が死ぬってことは小さい頃から何となくわかってたと思う」と語っていた。

旧来の Bowlby をはじめとした喪の理論では，死別した愛着対象とは分離して生きていくことが前提とされ，悲しみ続けるのは病的なこととされた。そして近年注目されている心的外傷後成長（Post Traumatic Growth:PTG）では，大きな心的外傷後に，肯定的な精神的成長が見られることを指摘している。

しかしこのＣさんの【埋まらない喪失感】を抱えたまま生きるという姿勢は，分離でもなく成長でもなく，愛する者との死別をそのまま受け入れるという，Ｃさんの経験知と死生観に裏付けられた対処法ではないだろうか。

また一般的に，人は高齢になるにつれ，多くの死別を経験する。そのたびにその人なりの死生観が育まれていき，親しい対象との死別に対してのその人なりの対処法をも磨かれていくのだとすれば，それは高齢者ならではのものであり，年齢を重ねていくことの大きなアドバンテージであると言えるのではないだろうか。

4 今後の課題と展望

本研究では，現在犬を飼育しているか否かという視点から TA を参照しながらペットと死別した高齢者の，悲嘆への適応プロセスについて探索した。

しかしどのデータも代表性の強いものではなく，理論的飽和に至っているとも言えないため，性急な結論づけは避けるが，本研究から得られた知見から，今後の課題と展望を考えてみたい。

4.1 調査対象者の個人差とグループ分けの軸

今回の調査では帰納的分析の手法として TA を用い，ナラティヴからボトムアップ式にテーマとサブカテゴリーを導き出したが，N ＝ 6 と調査対象者が少なかった。これにより未だ探索できていない事柄も多くあると思われる。

先述の Kemp ら（2016）によればレビューした研究内で扱われる悲嘆は様々で，深い悲嘆から比較的軽いものまで幅広く扱われていたという。この理由について Kemp らは，ペットとの死別による悲嘆は個人的な意味合いが強いことをあげている。これは本研究

で，協力者の個人的な背景や犬の死因，死までの経緯などによって悲嘆後の適応プロセスが変わってくることが垣間見えたことと矛盾しない。個人的意味合いの強いペットロス後の悲嘆については，定性的研究によってミクロレベルの様相を明らかにし，そこにおのずと見える社会的状況や文化的背景などと絡めて考察していくことが重要であろう。

また今回はサブグループに現在犬を飼育しているか否かという軸のみを使用し，動物飼育経験の質量や経済的な側面，同居家族の多少や関係など，異なった側面からテーマにアプローチすることはできなかった。そのため今後は，様々な条件を考慮して調査を展開していくことにより，より精緻に適応プロセスを記述・考察することが必要になると思われる。そのためには，あらかじめ質問紙調査で調査協力者の経験を推しはかっておくとその後のインタビュー調査でも精密な分析が可能になると考える。

4.2 死別までの経緯や飼い主の死生観との関連

今回の調査では，先述の通り，介護や看病の末の死別と急死とで，その後の悲嘆への適応や動物飼育への態度が違ってくるのではないかと推察された。しかし犬の介護に関しては研究の蓄積が浅く，多くはメディアに寄せられた当事者の手記や取材によるものがほとんどである。

また，飼い主の死生観や飼育経験の多寡とペットロス後の悲嘆への適応の関連についても未だ研究は進んでいないため，例えば死生観についての質問を絡めたインタビュー調査を実施することで，今後研究を深めていく必要があると考える。

4.3 ペットロスによる悲嘆と人との死別による悲嘆との相違点

今回の調査では，犬の死も人の死と同じく喪失感は埋まらないと言及した方や，犬の死は人と違い，何も思い残すことはないと語った方もいたが，他者の死の後に起こる感情や悲嘆と動物の死によるそれらとの差異については，従来から検討の必要が指摘されていた。

これについて，Eckerdr ら (2016) は大学生を対象に，人との死別による悲嘆と動物との死別による悲嘆について質問紙を用いて比較調査を実施した。それによると，人との死別による悲嘆の方がより重症度が高かったものの，人との死別経験者群と，動物との死別経験者群とで効果量は小さかったという。その要因として，死別した対象との親密さが最も強い因子として浮かび上がったことを挙げており，亡くした対象が人であれ動物であれ，対象との親密さが悲嘆の強さを左右することの可能性を第一に指摘した。同時に，ペットを亡くした場合にはその死が「承認されない死 (disenfranchised death)」となりやすいことや，動物の種類，飼い主のジェンダーなど，複数の要因が絡む点をも示唆している。

翻って，我が国ではペットと飼い主の関係の親密さが増したのは，室内飼育が一般的になって以降の比較的最近のことであり，Eckerd らの指摘がそのまま援用できるか否かは未知である。また，Eckerd らが指摘した複数の要因に加えて，年代により動物との関係の質に差異があることも考えられる。これらの点については，今後定量的研究と質的研究の両面から掘り下げることが望まれる

4.4「多頭飼育によるペットロス予防」「高齢者による犬飼育」の再考

ペット，特に犬を喪失した後に新たに飼う際には先述の通り，新たな愛着の対象となる新しい犬の存在以外に，犬がいる生活の再開が適応プロセスに影響していることが推察された。先に述べた主観的健康観と悲嘆への適応の関連を明らかにすることができれば，犬と死別した高齢者の悲嘆への適応について，またケアやサポートについてもヒントが得られるのではなかろうか。

また同様に，年齢に関係なく死別後に新しく犬を迎えた飼い主や多頭飼育をしている飼い主に対しても同様の調査を行うことで，新たなペットを迎えることの影響の大きさを把握できるものと考える。

今回の調査では，多くの調査者が「もう犬は飼えない」「また飼ってもいいのか」と悩みながら自らの選択をしていたことにも注目したい。高齢者がペット，それも活動量の多い犬を飼うことのリスクについてはメディアでも取り上げられがちである。しかしながら先述の松原らが指摘するように，犬の飼育は飼い主と犬の絆を深め，飼い主の孤独を癒すだけでなく，コミュニティを活性化する機会となりうる。今後

はその肯定的な可能性を踏まえて，また世間の要請ではなく高齢者の自己決定を尊重するという点からも，議論を深めていく必要があるだろう。最近では，飼育している動物と入居できる老人保健施設や，面会自由の老犬ホームも少しずつだが増えてきている。年老いても犬と暮らしたいという高齢者のニーズにこたえるような対応が広がってきていることを踏まえて，高齢者の健康とコミュニティの活性化に資する，高齢者と犬との生活について議論すべきではないか。

犬の存在は人とコミュニティ，人と人の間を媒介するが，犬との死別はそれらと関わるのか、関わるとすればどのように影響し合うのかという点も，今後研究すべき点であると考える。

4.5 TA 法の利点と限界

TA 法は，協力者ごとにコードブックを作成し，コードブック間でのコード内容を比較検討しながらそれを洗練させ，相違点と相似点を明らかにするという手法である。よって，演繹的分析手法・帰納的分析手法，ハイブリッドアプローチと 3 つの分析法に応用できる。

本研究では生データからテーマを生成する帰納的分析手法として使用したが，協力者の少なさにより帰納的分析手法に必要な比較基準が不明瞭な部分がある。通常 TA ではそういった場合，既存の理論を用いて再分析あるいは再解釈するというハイブリッドアプローチが有効であるとされるが，その場合はなぜその理論を用いるのか，研究立案時点で明らかにする必要があるという（土屋，2016）。本研究ではテーマ生成のみを念頭に置いて研究を立案していたため，ハイブリッドアプローチを実施することが出来ななかった。

今後は必要であればハイブリッドアプローチを取り入れることも視野に入れつつデータを追加し，コードをさらに洗練させることが必要であろう。

またその際には信頼性担保のため，より多くの質的研究に熟練した分析補助者を交えて検討する必要もあると考える。

引用文献

Bui, E., & Robert, P. (2020). “Grief before and after bereavement in the elderly: A commentary.” The American Journal of Geriatric Psychiatry, 28(5), 570-572.

Eckerd, L. M., Barnett, J. E., & Jett-Dias, L. (2016). Grief following pet and human loss: Closeness is key. Death Studies, 40(5), 275-282.

星旦二・望月友美子 (2016) ． 我が国の高齢者における犬猫飼育と二年後累積生存率． 社会医学研究， 33(1), 99-109.

Kemp, H. R., Jacobs, N., & Stewart, S. (2016). “The lived experience of companion-animal loss ： A systematic review of qualitative studies.” Anthrozoös, 29:4, 533-557

木村祐哉・川畑秀伸・大島寿美子・片山泰章・前沢政次 (2009)． ペットロス体験を「症候群」と称することによる影響． ヒトと動物の関係学会誌, 24, 63-70

Klass, D., Silverman, P .R., Nickman, S. (Eds.) (1996). Continuing bonds: New understanding of grief. Washington, DC: Taylor & Francis

松原崇・城仁士 (2002). 犬の飼育が中高年期にもたらす意義． 神戸大学発達科学部研究紀要， 10(1), 161-169.

二階堂千絵・安藤孝敏 (2015)． ペットと死別した高齢者の適応を支えたもの ： 死別したペットとの Continuing Bond に着目して． 技術マネジメント研究， 14, 13-22

二階堂千絵・安藤孝敏・梶原葉月 (2019)． 日本におけるペットロス研究の動向と展望． 横浜国立大学教育学部紀要． Ⅲ， 社会科学, 2, 11-22

ペットフード協会 (2019). 令和元年 犬猫飼育実態調査．「https://petfood.or.jp/data/chart2019/index.html」(2020 年 8 月 25 日)

Stewart, C. S., Thrush, J. C., & Paulus, G. & Hafner, P (1985). “The elderly’s adjustment to the loss of a companion animal: People-pet dependency.” Death Studies, 9:5-6, 383-393

Stewart, C. S., Thrush, J. C., & Paulus, G.

(1989). “Disenfranchised bereavement and loss of a companion animal: Implications for caring communities.” In K. J. Doka (Ed.), Disenfranchised grief: Recognizing hidden sorrow 147-159 Lexington Books/D. C. Heath and Com.

Strobe, M. & Schut, H. (1999) . “The dual process model of coping with bereavement : Rationale and description.” Death Studies, 23, 197-224

土屋雅子 (2016). テーマティクス・アナリシス法 インタビューデータ分析のためのコーディングの基礎. ナカニシヤ出版

van Dijk, S. A. (2019). The difference between species in grief after pet loss, moderated by social acknowledgement. (Utrecht University Master’s thesis).